

目的 ヒトの食味嗜好の傾向が、年令、性別により異なることは良く知られた事実であるが、成人と幼児との間の、個々の食品に対する味覚的嗜好の差を具体的に示した研究は少ない。そこで今回は、幼稚園児とその父母を対象に、いくつかの食品について、食味嗜好と年令、性別との関係を検討した。

方法 甘、酸、塩味食品につき総数15品目を選び、各食品について5段階の嗜好尺度を設け、その嗜好度を子、母、父別に判定させ集計した。その結果を各食品の嗜好に対する特徴を把握するため、嗜好曲線を示すとともに、子、母、父の嗜好の相違を嗜好度として嗜好得点の平均値±標準偏差で示し、±検定その他の統計処理を行った。

結果 若干の例外（甘味：もなか、酸味：夏みかんなど）を除いて、今回調査した食品のうち、子と両親の間で同じ嗜好度を示す食品は全く存在しなかった。

食品嗜好度の型には、子>母>父と嗜好度が減少型を示すもの（チョコレート、キャラメル、シュークリーム、カルピス、ジュース、おかしなど主として甘味またはそれに酸味が混じるもの）、逆に、子<母≤父と増加型を示すもの（梅漬け、塩こんぶ、たくあん、たらこなど甘味をほとんどまたは全く含まないもの）と、子<母>父の中高型を示すもの（もなか、ぜんざい、酢の物、塩さけ）の3型に大別された。

これらのことから、幼児→成人の味覚的発達、さらにこの間における味覚上の性差の発現が推知されると共に、演者らの提案する「嗜好指数」適用に関する重要な示唆が得られた。